

『住民と自治』(通巻642号)10月号付録 2016年10月1日発行 自治体研究社

とちぎの地域と自治

とちぎ地域・自治研究所 所報 第165号

〒3210218 壬生町落合 1-15-5 ポラーノ・どんぶり103号 TEL/FAX 0282(83)5060

メール: support@tochigi-jichiken.jp ホームページ: http://tochigi-jichiken.jp

郵便振替 00170-7-251641 とちぎ地域・自治研究所

○ 貧困の中の子ども達 畠山由美 ----- 3

第四次県政白書 9月30日発刊

「住民自治が輝くとちぎに」 －持続可能な地域づくり－

とちぎ地域・自治研究所は、9月30日に第四次県政白書「住民自治が輝くとちぎに－持続可能な地域づくり」を発刊します。2004年以来、知事選挙のある年に「県政白書」を発刊し、今回が4回目になります。

今回は、安倍内閣が、立憲主義を破壊する安保法制の制定や大企業の利益優先の経済政策アベノミクス、社会保障の改悪、地域の格差拡大・再編（市町村合併、道州制）につながる地方創生政策の推進など、強権的な政治を進め、さらに憲法改定まで目指している中で、憲法第8章の地方自治の本旨に基づ



いて国と対等の立場である地方自治体の県が、「地域（県民）を見、国を正す」という立場で、憲法と地方自治法を活かし県民の平和と生活の安定、住民自治による地域づくりを目指す県政に転換していくのかということが問われています。

そうした中で迎える県知事選挙にあたり、今後の県政の基本方向と各分野からの提言で構成されていま

す。1部1,000円（申込みは事務所あて FAX か E-mail で、会員は送料無料）です。会員はもちろん、広く県民への普及をお願いします。

発刊記念講演会

「憲法の危機の中で地方自治を考える」講師:白藤博行氏(専修大学法学部教授)

◆ 日時 10月30日(日) 午後1時30分から

◆ 会場等詳細は、別添チラシを参照ください。

◎ずいそうしゃ◎ブックレット 18

住民自治が輝くとちぎに

持続可能な地域づくり 第四次県政白書

とちぎ地域・自治研究所 [編]

はじめに——第4次県政白書の性格と構成	佐々木 剛	2
第Ⅰ章 総論 憲法・地方自治を守り、住民自治による接続可能な地域づくりのために		
憲法・地方自治の危機のなかの県政	大木 一俊	6
強欲資本主義からヒューマニズムに根差した社会へ	日高 定昭	17
TPP・アベノミクス農政の下での農業政策・地域政策	秋山 満	26
地方自治、住民自治を土台とする地域づくりを	陣内 雄次	34
「県民が主人公」の県政へ——今後の県政の基本方向	佐々木 剛	39
第Ⅱ章 各論 県政への提言		
栃木の工業・商業	日高 定昭	42
栃木県の農業政策の動向と課題	秋山 満	51
激変する介護保険制度 高齢者の生活は守れるか	佐々木 剛	59
栃木の子ども・子育て支援の現状と課題	はせがわ いっこう	71
災害から県民のいのちとくらしを守る県政に	野村 節子	81
ダム建設事業と栃木県政	服部 有	92
馬頭管理型産業廃棄物最終処分場	奥村 昌也	100
指定廃棄物処分場建設問題について	大木 一俊	107
住民協働のまちづくり	陣内 雄次	115
編集後記		126

貧困の中の子ども達

島山由美（認定特定非営利活動法人 だいじょうぶ）

はじめに

日光市からまいりました「認定特定非営利活動法人 だいじょうぶ」※という団体の島山です。私は、3人の子どもの持つ母親で、一市民として子ども達の貧困に関わっています。

日本の相対的貧困率は6人に1人というマスコミでも騒がれまして、うそみたいな感じで本当にいるのということですが、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」ができて2014年1月に施行されました。法律に基づいて2014年8月に「大綱」ができてからは、あちこちから呼ばれるようになりました。とにかく、本当にいるのかなという？が付く中で「見えにくいけれど

も実はいるんですよ」という話をして、貧困の中で実際に子ども達がどういう生活をしているのかということをお伝えしながら、それじゃうちの周りにもいるということで気づいていただいて、この課題に真剣に取り組んでいただければと思います。

今日は、私が今まで出会ってきた子ども達の話聞いていただいて、今私たち一人ひとりがこの小山市で、何をしていくべきなのかということ、共に考えていきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。（※特定非営利活動法人だいじょうぶ

HP <http://www.npo-daijobu.com/>

あなたの周りに貧困の子どもはいますか？

○ わかりやすい貧困

私は10年前から家庭児童相談室というところで、相談員として市の相談員とともに相談に乗る中で、いろんな通報や市民からの相談が寄せられました。例えば、家のリビングで子どもがみんなで食べようとすると、近所の子がいつも食べる時間になると来ていて、じっと眺めている子どもがいるんです。何かあげないと悪いのかなと思うけれども、他人様の子どもだしどうしようかなって考えるわけです。あの子は何か問題があるんじゃないかなとか、いつもお腹を空かしている子どもがいるとか、近所の子が勝手に自分の家に上がりこんで冷蔵庫を開けて食べていくんだけどという相談もありました。家の中に食べるものがないとか、あったとしても親がいないところで食べたら叱られるということとか、いろんな虐待の背景がある中でお腹を空かしてい

る子ども達がいるという事実が浮き彫りになりました。

お腹を空かしていれば、食べ物がないという貧困なのかなと思うし、季節や体格にそぐわない衣類を着ている、真冬なのに上着を着ていないとか、靴下を片方をしか履いていないとか、そういうことで、家庭に問題があるんじゃないかということになります。地域のお祭りで、すごく寒い日なのに靴下を履いてこないとか、薄汚れているとか、とにかく見るからに大丈夫かなというのは分かりやすいんです。何か大変だろうと。そういうものは割と通報が来るんです。

それから、電話を掛けたら大体「お客様のご都合により・・・」というアナウンスが流れたら、またこの家電話止まっちゃったんだねというのは、割りとあります。連絡が付けられる手段がない学校関係者はみんな

な困りますよね。今日も学校に来てないから確認してもらえませんかという問い合わせが学校からもあります。こういうものはわかりやすい貧困です。戦後の日本でしたら、みんな貧しかったのであまり気に留めなかったと思うんです。みんな貧しい中にいましたから割りとみんな元気に育ったんです。今、何故貧困が問題かという、貧富の格差が凄く広がっているんです。

子どものあたり前の暮らしというのは何なんだろうかということと考えますと、例えば、スマホです。あれガラケーだったら月3、4千円ですが、スマホに変えたら1万円くらいかかっちゃうんです。みんなが

○ 背景に貧困が隠れている場合がある

私たちの団体は、虐待防止の団体です。身体的虐待やネグレクト、心理的虐待とか現在虐待を受けている子どもの保護やケアに当たっています。そしてその虐待が起きないようにするための予防ということで、家庭支援にすごく力を入れています。とにかく虐待に至ってしまう前に親支援とか家庭支援をしないとならないということでやっています。

子育てというのは本当に大変です。経済的な財源とか子育ての具体的なマンパワーの助けが得られない環境では、子育てを放棄してしまいます。例えば、子どもを3人、4人産んで5人目と思ったけれども、経済的には苦しいから諦めようというときに、中絶は一つの選択肢になっています。そういう方法で子育てを放棄するとか諦める。あとは、結婚して直ぐに子どもを持たなくても、もう少し経済が安定して子育てできるぐらいになったら子どもを産もうという選択肢もあります。それから、親も忙しくて子育て支援が得られないという場合はやっぱり諦めてしまうんです。しかし、中絶するといっても10万円以上かかります。10万円以上も出してまで中絶ができなく

持っているものを持てるか持てないかで格差ができます。習い事をやるかやらないか、旅行に行くか行かないのかもあります。宇都宮の中学校にお子さんを通わせている親御さんがこんなことを言っていました。夏休みが明けると、海外に行った娘の友達はお土産をクラスのみんなに配るんです。うちの子は海外なんか行ったこともないし、やはり一つのクラスだけでも凄く格差ってあるねという話をしたことがあります。そういうように、相対的貧困率が6人に1人というのは、ごはんが食べられないという絶対的貧困とはちょっと違います。本当に普通の暮らしができない子ども達のことをいいます。

て、仕方なく産んでしまって、あとは誰にも相談できずにいる未婚の若いお母さんもいます。若年層では、妊娠したかもしれないと思っても、誰にも相談できない、お母さんにも言えない中で、どんどんどんどん月が経ってしまって死体遺棄事件になってしまうというのもあります。

虐待死亡事例で一番多いのが零歳です。産み落してすぐに遺棄してしまうというのが虐待件数の半分以上です。誰にも相談できないなかで脱胎ということになってしまうんです。そういう痛ましい事件があるんですけれども、産んだあとでは殺人死体遺棄で罪に問われます。私達は、たとえ家族に子育てを助けてくれる人がいなかったとしても、たとえ経済的状況が安定していなくても、生まれてきたお子さんを一緒に育てましょうよねというふうに取り組んでいます。

私たちは虐待防止の団体だったんですが、いろいろな方と繋がって相談を受けている中で、家庭訪問をしてみたら、実はすごい貧困だったというご家庭が沢山あります。例えば、コンビニでおにぎり一つを盗むという事件がありました。中1の男の子です

が、日光市の今市地区は学校指定のジャージで登校なんです、その家庭は母子家庭でお母さんが働き詰めで働くんですが、ジャージを毎日着せなければいけないので、夜洗濯して干しておくんです。意外と乾きが早いので干しておいて、次の日それを着ていきます。ある日お母さんが干すのを忘れて寝ちゃったんです。それで私服を着て行ったんです。中1年の男の子が私服で登校できますか。みんなと違うのはやっぱり恥ずかしいんです。学校まで歩き始めたのはいいんですけども、やっぱりこれじゃ学校には行けないと引き返して、お母さんの職場のすぐ側のコンビニや電気屋さんでウロウロして時間を潰すんです。そしてお昼にお腹が空いてついおにぎり一つを万引きちゃったんです。

ゲームセンターに行く子がいます。家にいてもつまらないんです。お母さんもないし、食べるものもなければ、つまらないからゲームセンターにたむろします。お金は持っていません。じっと皆が楽しそうにやっているのを見ている。そこにお財布が置いてあると、自分もゲームをやりたいので、そこのお金に手を出してしまうという通報が結構あります。

万引き一つとっても、おにぎり一個パン一個という背景に貧困があるんです。

それから非行では、夜間徘徊、暴行、飲酒いろいろあります。相談室に夜間徘徊の相談があります。学校からも相談があったりします。やはり家に居場所がないんです。それでどっかでするむんです。しかも、類は友を呼ぶじゃないけれども同じような境遇の子とつるみます。家に帰っても、親が勤めていていなかったり、再婚して継母や継父だったりして、家に自分の居場所がない子ども達なんです。ある子のお母さんが家を出てしまっ、お父さんが再婚して新しい家を買ったんです。小学生の女の子で

すが、冷蔵庫を勝手に開けるなって言われて、冷蔵庫開けると凄く怒られるということで、やっぱり家に居場所がない中で徘徊をするということもありました。

それから不登校です。だいたい不登校の対応は学校がやります。不登校対応の教員がいて、一生懸命やります。その中でも、なかなか大変だというケースは学校から家庭児童相談室に相談がきます。ある家庭で、小学生に会ってみました。学校に行かないでうちにいてもつまらないでしょう、だからおばさんと一緒にうちの「ひだまり」に行かない、一緒にごはん食べようよと言って誘い出します。車に乗って、不登校している学校の側の道を通ったんです。そして、車の後部座席の下に隠れるんです。やはり学校には行かなきゃいけないんだと思っていて、後ろめたくて隠れたんです。授業中だから大丈夫だよといって、車に乗りながら話をしたところで、本人が話し始めたんです。小学校2年生です。僕が学校にいくとお金が掛るんだと。給食を食べるとお金がかかるし、ピアノとか学校で使う物の集金袋が渡されると、お金のことでお父さんとお母さんで喧嘩になると。喧嘩も止めて欲しいし、とにかく僕が学校に行くからお金が掛るし、自分が学校に行くことが迷惑だっていうんです。そこで私も何も言えなくて、子どもはお金の心配をしなくていいんだよとしか言えなかったんです。学校にいくことが子どもの仕事でしょと、だから、学校に行くことは親が考えるからあなたが心配することじゃないよと言いました。ですけれども、実際に子どものお母さんは精神を患っていて働けないんです。お父さんも不景気で収入が不安定な中で、確かにお金のことになると喧嘩が絶えないんです。そういうことで不登校になる場合もあるんです。中3年の女の子が不登校だということ、で中学校から相談がありました。運動会は

暑いシーズンにあるんですが、暑い時にお休みがちになるんです。中学校最後の運動会を何とかみんなでやりたいということで、家庭訪問をしてみると、母子家庭でした。ガスの滞納が膨れあがっていて、止まっていたんです。それでお風呂に入れないうんです。中学3年生の女の子がお風呂に入れないうんです。汗臭いとか気になるわけです。それが不登校の原因になっていたんです。お母さんと話している間に、ちょっと待ってと言うので、何だと聞くと、12時になると電気が止まっちゃうからそれまでにお米を磨いでごはんを炊いておかないとご飯が食べられなくなっちゃうからと言うんです。それまでに冷蔵庫の中のもので何か作っておかないと腐っちゃいます。そのお母さんは、督促が来て止まったら払う、止まったらまた払うということを繰り返していました。何時になったら電気が止まるということがよくわかっているんです。ガス代は何ヶ月も滞納してしまっただけで7万円くらいなんです。払えなくて諦めているんです。それで、どうしているのかと聞いたら、お風呂はいつも水を浴びているんです。妹は小学生で、帰ってくると、今日も水風呂じゃ嫌だよというんです。3本セットのカセットコンロを買ってきて、それで煮炊きをしているんですが、それで鍋にお湯を沸かして体を拭けばいいんでしょっていうんです。そのお母さんはすごく明るいお母さんで、しょうがなくてこうやっているって言うんです。お母さんの収入を聞いたら、本当に不定期で、週末くらいしか仕事がないんです。日銭が入ると食材など今必要なものを買うという形で家計が全然回っていないんです。

なので、一緒に窓口に行って生活保護の申請をしました。このケースは生活保護は通りました。日光市の場合、生活保護が下りるまでに、だいたい普通で1ヶ月かかります。それなのでそれまでの間、「ひだ

まり」に来てご飯を食べて、お風呂に入っただけでいいよって誘いました。そしたら喜んで、私は大丈夫だから娘2人お願いと言われて、お母さんも大丈夫ですよと言ったんですけども遠慮されました。日光市は市営の温泉があって、200円くらいで入れるんです。姉妹はお風呂セット持ってきて、狭いんですけども凄くはしゃいで、長い髪の毛をドライヤーで乾かして、ご飯を食べて帰ったんですが、帰り道2人が凄く楽しそうにしゃべっているんです。お姉ちゃん、お風呂に入ったの一年半ぶりだね、気持ち良かったねって言うていたんです。本当に言葉がなくて、そこまで大変なのかと思いました。お風呂に入っただけはしゃぐというのは、普通の暮らしでは当たり前のことですけれども、家庭の状況でお風呂に入れないう子がいるんです。学校ではそこまで把握できていませんでした。

家の水道が止まっている、ガスが止まっている、電気が止まっているということは、恥ずかしくて子どもは言えないんです。親からもそんなことは言っちゃ駄目だよと口止めされます。何故なら、こんなこと誰かに相談したって、あんたの家の問題でしょ、ちゃんとしなさいよというふうに指導を受けるだけです。早く滞納を払ってガスを出してもらいなさい、水道出してもらいなさいと言われるのが落ちです。ですから、言えないし、子どもも恥ずかしくてお友達になんか言えないから分りにくいんです。

子どもさんの家でももしかしたら水道が止まっているかなと思って、家庭児童相談室から日光市の水道課に連絡を取りました。連絡を取ったところ、個人情報の保護の問題でいくら子どもさんがいたとしても水道が止まっているかいないかはお伝えできませんと言われてました。横で繋がっていかないんです。電気やガスは民間ですからもちろん情報はくれません。でも、今こういう

貧困問題がクローズアップされているのであれば、せめて子どもさんのいる家庭で、ライフラインが止まったのであれば、やっぱり市の窓口に通報するなり、何かしないとならないんです。私たちがいろんな相談を受けた時に、水道課、東京電力、民間のガス屋さんの窓口と一緒にいきます。すみません、この家庭に子どもさんがいるので何とかありませんかという、みんなですよ、人ですから、もちろん今まで滞納した分は納めなくてもいいということにはなりませんけれども、分納で、どういう形なら払えますかということを考えてくれるんです。あるところは、行っただけでまだ払ってもいないのに、じゃあとにかく今日水道出しましょうと、それでいついつまでに滞納分を5千円づつを払ってくださいねって、協力的なところはそういうふうにやってくれるんです。

そのためには、当事者の家庭だけで行っても駄目なんです。こういう問題を解決するには力が弱い方達があります。一般的には、お父さんに相談したり親戚のおばさんに相談したりして急場をしのぎます。誰か友達に相談したりすれば、子どもがいるから困ったねって言って、ちょっと貸すよとか言ってくれます。こういうどうにもならなくなってしまう家庭というのは、やはり頼れる親兄弟がいないんです。

収入が十分でない家庭というのは一杯ありますよね。その中で、車の車検が高く家計に響くよねえとか、修学旅行だと小遣いがあるよねだとか、小学校入学のシーズンに勉強机をどうするのとか、ランドセルはどうするののかという時になると、必ずおじいちゃんおばあちゃんや叔父さん叔母さんが来て、ランドセル買ってあげるからねといって、一人の子どもに対して周りが沢山応援してくれるわけです。応援団がないか少ないと貧困になってしまって、そ

こから抜け出せない家庭があるんです。

家庭内暴力もあります。あるお母さんから高校の定時制に行っているお兄ちゃんが、暴れているから来て欲しいと泣きながら電話がありました。行ってみると、家の中のガラスが割られていて、机の上に黒いマジックでガス、水道って書いてあるんです。お兄ちゃんは定時制の高校に行く前に、湯沸かし器で頭を洗っているんです。学校にはスッキリして行きたい。でも、ガスも止まっている、水道も出ないとなると、苛立たないわけがないんです。経済状況から家庭内暴力になるというケースもあるわけです。

虐待ですけれども、お金がないことで夫婦喧嘩になることが非常に多いんです。結婚して子供を産んで、いつも夫婦喧嘩になるのはお金のことです。夫がパチンコ依存もあって、結構給料を使っちゃうんです。それでこのお母さんは子どもの前でカーッとすると夫を殴っちゃうんです。それを2才の子供が見ているんです。心理的な虐待です。子どもが、パパママ喧嘩は止めてって言って泣いているんです。夫婦喧嘩を子どもに見せるというのは凄惨恐怖です。子どもの泣き声とか親の怒鳴り声、もの凄惨大喧嘩になります。それも収入が不安定なことで喧嘩になるというケースが非常に多いです。

私は虐待をしてしまう親のための講座をやっています、今年で5年目になります。4年間やってきた中で、子供を叩いてしまう、暴言を浴びせてしまう、このままでは事件に発展するのではないかという方たちの話を聞きました。結婚して子供を産んだ時は、みんないい家庭を築きたいと思うんです。それで一生懸命頑張るんだけど、人生の中にはいろんなストレスがあります。世の中というのはストレスだらけです。仕事上のストレスもあるでしょう、経済的困窮、自分の病気、子どもの病気、それだってストレスです。そういったいろ

んなストレスが重くのしかかった時に、やっぱり平常ではいらなくてイライラする、子どもに当たる、弱いところに行きます。お話を聞いている中で、経済的困窮のストレスが一番多かったです。一生懸命家計が大変なのに材料買ってきて、子どもが喜ぶと思って作ったのに子どもが食べないので、手を挙げてしまう。特に、離乳食の時、初めての子育てのお母さんは頑張っちゃうんです。慣れない調理をして食べさせたら口から出しちゃった時に、怒り心頭で気が付いたら子どもを殴っていたということがあります。いろんな意味でみんな大変な中でやっているんですが、ストレスがのしかかった時に虐待に発展してしまう場合があります。

そんな中で、問題が虐待だったりすると、そっちに焦点がいつてしまっていて、どうしようもないよねとか、あの家はねってなるんですけども、背景に貧困という問題が隠れている場合があります。

修学旅行は各学校でだいたい一人くらいは行けない子どもがいます。ある学校の先生が凄く熱心で、うちのクラスの中学3年生の親が経済状況で修学旅行に出さないとやっているんだけど、この子は良い子だから何とかしたいんだけど相談に乗ってくれないかという電話をいただいて、お話を聞きに行きました。外国籍で今ビザが切れていて自由行動ができないんです。3ヶ月間はビザがおりないので、お母さんは働いていたんですけども、ピザが下りるまでは働けないんです。だから収入は零です。そういう中で来週には修学旅行が控えている。その子は日本語も上手でお母さんの通訳もしているんです。そういう子なので何とか応援したいということで、修学旅行の代金7万円とお小遣い2万円持たせました。今まで修学旅行の補助をしたことありませんでしたけども、スタッフで話しあって、やっぱりこれは、例えば、自分の

孫だったら修学旅行に行くんだったら餞別ぐらい出すでしょう。お小遣い持っていきなれて。その子にとって修学旅行は遊びではないんです。授業の一環です。みんなで修学旅行のために何ヶ月も前から準備をするんですよ。グループになってどこを見学するとか、見学先のことを勉強します。それだってみんな一緒に授業の中でやります。最初から諦めてる子はいれないんです。そういう意味では、小学校、中学校せめて義務教育は、学校で掛かる費用は遠足も修学旅行も、それこそ鉛筆1本、ノート1冊学校でみてもらってもいいのではないかと感じます。日本の小中学校は家計の負担が大きすぎるんです。そこは国の問題として考えていかなければならないのかなと感じます。

それからもう一人「ひだまり」にずっと通っていた中3の男の子で、今学習支援で受験勉強頑張っています。この子の家も修学旅行の費用の積立がなくて、お小遣い出せないから行かせませんという話を担任の先生から聞きました。私たちが「ひだまり」に来ている子なので、何とかしたいということで、スタッフみんなのカンパでこの子にお小遣いを集めました。そして、先週の土曜日に学習支援が終わって家に送ったときに、お母さんに応援団のおじさんお婆さんのお小遣いだから持って行って渡そうとしたんです。お母さんは、いただけませんと頑なに拒否しました。だけど、昨日お母さんに電話をしまして、お父さんお母さんが大切に育てたお子さんでしょ、私たちにとっても大切な子なんです。だから応援させてくださいって言って、学習支援に来た時には持たせますけれどいいですねって言ったら、お母さんは本当に喜んでくれました。いつもお世話になっていてこれ以上お世話にはなれないと思っていたんです。そんな水臭いこといわないで、もしおじいちゃんお婆あちゃんがいたら、きっとお小

遣いを出してくれたでしょう、私たちはおじいちゃんおばあちゃんの代わりですよということで、修学旅行に行くことになりました。

学校の中で忘れ物が多いとか、集中力がないうとか、ふらふらするというのがあります。月曜日にふらふらするとか、目眩がするとかというのはだいたい土日食べていないんです。ネグレクト傾向で家の中で食べ物がなかったり、食べさせてもらっていないという家庭の子どもは、だいたい週末

に食べていなくて、月曜日にふらふら状態で学校に来ていましたので、「ひだまり」に居場所を用意しました。「ひだまり」に来るまでは、お腹が空いたら親から布団に入って寝ていなさいって言われてきたという子もいました。お腹が空いたら動くと余計にお腹が空くから、だから寝ていればいいでしょうというんですが、でもお腹が空きすぎて眠れないというのもありますよね。そんな状態の子ども達がいるということです。

貧困の実態

○ 相対的貧困率 16.3%

改めておさらいすると、日本の相対的貧困率は16.3%ということが2014年7月に発表になりました。これは、日本の子ども6人に1人が貧困だということです。その中の54.6%がひとり親世帯の子どもだということです。要するに母子家庭です。相対的貧困というのは、社会において当たり前とされる生活をするのが困難な生活水準をいいます。これはどのレベルかといいますが、食べられないというのは違います。食べられるけれども、友達と遊ぶことができない。中学生だって高校生だって、友達と遊ぶ時に空き地に行って缶蹴りをするなんて遊びはしません。友達と遊ぶというのは、映画を見るときか一緒にゲームセンターに行くよとか、そういうレベルです。お昼はマックで食べようとか、そういう意味でのお小遣いを持っていないと、友達と遊べないんです。

それと、休みの日家族と一緒に出かける、みんなで出かける、夏休みに旅行に行く、海水浴に行く、花火大会に行くというのが普通の暮らしだと思います。一般家庭で子どもさんがいれば、夏休みは一大イベントです。クリスマスはどうですか。お正月はどうですか。お正月なんてお年玉の掻き入れどきですよ。行かなくてもいい家

までお年玉をもらいに行きますよね。それが子どもなんです。それが普通の暮らしだと思います。子ども達にとって、夏休み、春休み、冬休みって待ち遠しいです。

我家は5年前にファミリーホームに移行しました。それまでは里親家庭でしたから、順番に子どもがいました。里親というのは4人まで養育できます。4人養育してたときに、どうしても家には居られない、親を殺したいとまで言った中学生がいたんです。いろいろ家庭支援をしたけれども、これ以上家庭においたら、この子が本来被害者であるにも拘わらず加害者になってしまうかもしれないという危機感から、面倒見ようということで、ファミリーホームになると定員が6人になるので、その子を受けるときにファミリーホームに移行しました。彼は学力が余りないんですけれども、一生懸命受験勉強しました。もともと母子家庭で、お母さんも進学させる気持ちはなかったんです。でも、我家に来たことで、県立高校はハードルが高すぎてなかなか勉強が付いていけなかったのが、私立の高校に何回もトライして合格しました。この子が3年間通って高校を卒業して、卒業証書をもたらしてきたときは、うちの家族の中で

高校卒業できたのは俺だけだって言って威張っていました。そのくらい本当にうれしかったんです。彼は親からの感染で元々病気を持っていたので、2年延長して病気を徹底的に直して、今は社会人として働いています。

去年からお預かりしている中学3年の男の子は、旅行をしたことがないんです、夏休みに横浜のホテルと一緒に泊まったときに、エレベーターが空いたときにバーっと走って行ってみんなビックリしちゃったんです。エレベーターに乗ったことがなかったんです。体験不足だと思うんですけど、私の夫からお前何やってるんだと、降りる人を待ってから乗るんだと、日光市では電車で余り乗らないので経験不足のせいなのか、ただ単に突っ走りたかっただけなのか分からないんですけども、恥ずかしい思いをしました。

世界では発展途上国に貧困の子が沢山います。でも世界の中の貧困の子どもの10人に1人が日本の子どもだということが出ているわけです。信じられますか。日本は一応先進国なんです。先進国なのに、世界の貧困といわれる子どもの10人に1人が日本の子どもというのは恥ずかしいことですが、それが実態です。

絶対的貧困というのは、衣食住がままならない生活状況のことをいいます。こちらは統計で何人に一人ということは残念ながら表わされていません。でも私たちの相談室にはいろんな電話が掛ってきます。でも、

○貧困の状況は見えにくい

それから貧困の状況は見えにくいということです。何故なら、子どもが自分の家の貧困状況をわかるわけではないですね、家はまず一つとこういふ状況だから、どれが貧困でこれが普通かということはわかりません。ですから自分の家がおかしいから助けを求めるといふことはしません。例えば、

初めから今日食べるものがありませんとは掛ってきません。いじめの問題だったり虐待だったりという相談で掛ってきます。でも、担当の相談員が関わっている間に、だいたいその担当の相談員を名指して電話を掛けてきます。そして、今日のお昼ご飯はお米が尽きちゃってないんですとか、赤ちゃんのオムツがなくてどうしたらいいですかということまで相談する、SOSを出してくれるようになります。今まで親身になって相談に乗ってくれていて、隠し事はなく誰かに助けを求めれば何とかなるということがやっと分かって、気づいた人たちがそういう相談をしてくるようになります。

日光市には今2ヶ所母子の居場所を用意してまして、その居場所の中には子ども達に一杯食べさせてくださいとか、衣類の提供、それからお米とか野菜とかお菓子とかいただいています。初めは、居場所に直接持ってきてくださいっていたんです。が、ここ1、2年は、相談室に持ってきてもらって、これは居場所の分、これは個人の貧困家庭に配る分として仕分けをします。そしてそこでだいたい週に何回か食べるものがないという相談がありますので、相談室から家庭に行く時に持っていくことにしています。だいたい日持ちのするものが多いので、寄付で集めたお金で、途中野菜とか果物を買って持って行っています。そんなふうに関わっている家庭は絶対的貧困層だというふうに思います。

ごはんが食べられなかったとしても、誰かに助けを求め、自分の現状を誰かに訴えるという手段がないんです。ですから見えにくいんです。物心が付いてくれば、もしかしたらうちは誰ちゃんの家と違うというのが友達の家遊びいくとだいたい状況が分ります。友達の家は、三食、朝ご飯、昼ご

飯、夕ご飯とあって、休みになると出てくるけれども、うちは休みになるとご飯が一食しかない。そういうことが分かってきます。

2013年5月に大阪のマンションで3歳の子どもと母親が餓死しているという事件がありました。お母さんのメモ書きが残っていて、最後にお腹いっぱい食べさせてあげられなくてごめんねって書いてあったそうです。胃の中は空っぽだったということです。遺体が発見されたのはその年の5月です。2月には亡くなっていたようですので、2月から5月の間、誰にも発見されなくてひっそりと亡くなっていた親子です。記録を見ると、お母さんは市の窓口は何回か相談に行ったそうです。何でそこで、生活保護に繋がらなかったのか、なんで相談だけで終わってしまったのか、相談を受けた方がその後お子さんがいて大丈夫かなって思わなかったのかなど。日本の手続きは全て申請しないとお金は下りません。なかなか自分で訴えないと駄目なんです。

食べるものが無くなって餓死してしまうまでになんで生活保護を受けないのかって不思議に思うでしょ。だけど日本の制度の中で、生活保護を受ける水準にあるにも拘わらず受けていない人が7、8割いるんです。絶対的な貧困層です。私も何ケースか一緒に生活保護の窓口に行こうと案内しました。1人だと行きにくいとか怖いとか、うまく喋れないし、恥ずかしい、国の世話になるくらいだったら自分で何とかしたいとか、頑張りますと。でも病気があったりしたら頑張れないんです。

ワーカーさんからはこういう質問をされます。収入はどうですか、今まで働いていたけれど、ホテルの掃除とかは2月、3月は日光地区はお客さんが少なくなるとお金は3000円、4000円くらいで、夏休みとか紅葉時期は10万円くらい貰えるけれど、

お客さんが減ってしまうと貰えないんです。ということで、給与明細を持ってきました。助けてくれる親族はいないんですか、あなたのお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん兄弟はいませんか、全部聞かれます。いるけれども疎遠になっています。申請書を書いた時には、分かっている範囲内の家族に通知が行きます。何なにさんが生活保護の申請をしましたのでできれば月に1万でも2万でもできる限りの支援をしてあげてくださいという通知です。そうすると、ほとんどの方がこれ以上親に迷惑を掛けられない、さんざん心配を掛けてきて、やっと落ち着いたと思ったら、お金がないということで心配を掛けられないとか。親に猛反対されて結婚して、そして別れて、猛反対されて子どもを引き取ったのに、今生活保護の申請をしているなんてとてもではないけれど言えないと。なかなかハードルが高いんです。そこで親に相談できないんです。それとか、保険に入っていれば、先ず保険を解約してから申請してくださいと言われます。それで、ある家庭は、おばあちゃんが子どものために学資保険をかけていたんですが、その保険を解約してくださいって言われました。学資保険は、自分の家はお金がないから、おばあちゃんが掛けてくれていたんです。それを解約なんてできないと言って諦めた方もいました。

それから親が残してくれた土地と古い小屋かなと思うくらいの家があったんですが、それを売ってお金にして零になったらきてくださいって言うんです。でも、本来なら土地と家があるだけでもありがたいんです。そのお母さんは諦めたというか、考えますって帰りました。その後、数年して、良く知っている人だったので電話をくれました。保育園に行っている一人娘さんが喘息だったんです。発作が起きると1週間は

保育園を休ませなければならなくて、そうするとお母さんはパートを休まなければならないんです。それでパートを首になってばかりいるんです。それで収入がなくて、本当に経済困窮なんだということでした。それで、家庭訪問をしたんです。大丈夫です何とかやります、仕事をまた見つけたからと言っていたのですが、それから半年、1年くらいで同じように無職になってしまっていて、最終的には生活保護を受けたんですけれども、何故発覚したかという、去年の寒い時に、お母さんがホームセンターで手袋とホットカーペットを盗んだんです。大きいものをレジを通らないで持って

貧困は自己責任？

貧困は自己責任か？ということ。だいたい台風とか自然災害があると、家が流れてしまったとか、仕事ができなくなったとかで、義援金とか募金とか一杯集まるんです。それは気の毒だねって、心情としては黙って入れないからです。自然災害は待たないにきます。ですからみんな同情します。だけど、この家にお金がないのは働かないのが悪いんじゃないの、ガスが止まっているのは何とかしなさいよ、というのが割りと一般の感覚だと思います。でも、お母さんに精神疾患があったり、お父さんがうつ病で会社に行けなかったりしているわけです。そこにいる子どもにとっては、お金がなくて、ご飯が食べられないとか、着るものも着れないとか、学校に行けないとかいうのは、子どもにとっては、自然災害であれ、親が病気であれ、事故であれ、うつ病であれ、精神疾患であれ、どんな事情でも状態は同じなんです。理由はどうであれ、経済的に困窮しているということには変わりがないんです。子どもには罪はないんです。どこの家庭にいる子ども

出てきちゃったんです。それで警察に呼ばれて捕まっちゃったんです。警察から連絡が入ったので、行ってみました。別に罪には問われませんでしたけれども、本当にお金がなかったんです。それで相談員と行ってみたら、ガソリンがほとんどないということで私たちの方でガソリンを満タンにしてきたのを覚えています。お母さん、恥ずかしいではなくて制度を使いましょうよといって、何とか生活保護に結びました。その家庭の場合いろいろな相談員が関わって、家を売るよりもこの家に住んでいた方が家賃補助を出さなくて済むから、何とか出してくださいということで、やっと下りました。

にも罪はないんです。あなた働いて家計を助けなさいって、小中学生には言えないです。高校生くらいになれば、アルバイトで家計を支えるということもあります。そうした自己責任ではないかという考えがある中で、いえいえ自己責任ということで片付けられないという事例を紹介したいと思います。

一つは、家族構成が、お父さん、お母さん、長男9歳、次男8歳です。3年前にお父さんがうつ病を発症しました。母親のパート収入で家計を支えていました。でも去年、市外に住む母方の祖母が入院したんです。それで娘であるお母さんが祖母の看病に行くために仕事を休みがちになってしまいました。お父さんは何回か会社に戻りますけれども、うつなので3か月と続かないで、また行けなくなってしまうということの繰り返しで、収入がない中で、あつという間に家賃滞納、学童保育料の滞納、携帯代も滞納してしまって電話も繋がらなくて、光熱費まで滞納してしまったという家庭です。いろんな支援を決めました。学童保育に入れないとお母さんが働けないの

で、滞納しても行っていたんです。実家のお母さんが安定してきたので、少し仕事をしようかと思っても、やっぱりまず学童保育に預けないと仕事を探せないということで、「ひだまり」の利用に繋がったケースです。

二つ目は、家族構成が、お父さん、お母さん、長男8歳、長女5歳、次男2歳です。4年前にお父さんの勤めていた会社が倒産しました。その後、収入が不安定となります。今2歳になっている次男の出産を機にお母さんはパートを辞めました。それで、あっという間にお兄ちゃんお姉ちゃんが通っていた保育園の保育料が滞納してしまって、保育園を辞めざるをえなくなりました。少子化で赤ちゃんができて本当にうれしいねっていうのが一般常識ですが、この家の場合は、この妊娠出産のためにお母さんがパートを辞めざるをえなくなり、お兄ちゃんお姉ちゃんも結局は保育園をやめざるをえなくなってしまったんです。狭いアパートの中で、お兄ちゃんお姉ちゃんが保育園に行けないので騒がしくて大変です。

「Your Place ひだまり」とは

「Your Place ひだまり」ということで、簡単に私たちの「ひだまり」の紹介をします。私たちの団体は子どもへの虐待を無くすこと、虐待の未然防止と起きている虐待の終止ということを目的として立ち上がった団体です。現在、相談から支援まで切れ目のない体制で対応しています。母子の居場所「ひだまり」は「実家」のような位置付けです。ここで何をするかというと、虐待、ネグレクトいわれる家というのが分かっていたので、学校などの通報により家庭訪問をします。そうすると、作ってもこの子が食べないんですというお母さんがいます。結局、何の支援も入れない

それで安心して赤ちゃんが産めるようにとお兄ちゃんお姉ちゃんの2人の子を「ひだまり」で預かりながらお母さんは出産しました。この家とは、実家のように関わりました。その家も実家があれば、助けてもらえたかと思うんです。実はこの家は2年前に生活保護に何回か足を運びましたけれど、若いんだから働きなさいということで帰されました。このお父さんは、真面目な方なんですけど、一番大変なのは運転免許を持っていないんです。日光市で運転免許を持っていないと、仕事を探すのは大変です。だからこのお父さんは頑張って自転車で通える範囲の仕事を捜していたんです。今この子が2歳になって保育園に入れるようになったので、お母さんも仕事に就いて何とか困窮から少しずつ脱出しつつあります。

これは自己責任ですかといわれても、そうではないと思うんです。どこの家庭にでもありえることです。ただ問題は、助けてくる親や親族がないということです。そこが問題だったのかなと思っています。

んです。私たちが団体を立ち上げた時には、相談室と家庭訪問の事業をやっていました。子どものいる家庭にヘルパーさんを派遣する事業、ヘルパーステーションと居場所「ひだまり」はデイサービスという位置付けです。

私は元々高齢者のケアマネージャーでしたから、相談室では子どものケアマネと思っています。子どもが地域の中で安全に健全に育っていくためにどうしたらいいかなということを考えて、どういうところに繋がれば子どもが地域の中ですくすくと健やかに育つだろうということを常に頭において事業展開するんですけども、なかなか子どものデイサービス、子どもの居場所というのはありませんでした。東京では産前産

後の家にヘルパーさんを派遣するという制度まであるそうです。栃木県では、去年からファミリーサポートセンターで、産後のお母さんのところにヘルパーさんが、家事援助でいくというのがやっとできました。この団体を立ち上げるときにはヘルパーさんみたいな制度はなかったの、私たちが独自で、ヘルパーさんみたいに家事支援、育児支援で出かけていきました。家の中に入れてくれるお母さんはまだいいんです。お掃除手伝うよとか、同行支援で買い物と一緒に、スーパーとかでここはオムツが安いよとか、お米が安いよとか一緒に行って車を出して、そういう支援まではそれまでやっていたんです。でも、唯一、家庭の中に入れない、一緒に行動できないお母さんへの支援というのはできなかつたんです。

でも、子どもが明らかにお風呂に入っていない、ご飯を食べていない、どうしようか、ただ見守っているだけではいけない。そうすると子どもの育ちに凄く影響するんです。環境が変わらないまま、3年5年というのはあつという間です。一番楽しく思い出がいっぱい作れる子ども時代に、そういった経験なしに、ただただ家庭の中にいる子どもがいましたので、これはもう黙っておれないから地域に居場所を作って、実家のじいちゃんおばあちゃんの家のように連れてきて、そこで面倒見ようということの発想でできたのが「ひだまり」です。

「Your Place ひだまり」が最初の居場所です。2ヶ所目は高德というところに作りました。ここでは、子どもだけではなく、お母さんは午前中お風呂に入りに来ていいよ、午前中から来たお母さんには、もれなくお昼だよ。一切の支援、サービスには自己負担がないので、本当に実家のように「ひだまり」に赤ちゃんを連れてくると、安心してそこでテレビを見た

り雑誌を呼んだり昼寝をしたりするんです。赤ちゃんは大体スタッフが見てくれます。この間も、あるお母さんがお子さんを連れてきて、お子さんを抱いたときに、お子さんが昼寝をしたんです。それでお母さんは外走ってきてもいいですかというんです。スタッフが子どもをみている間に、発散のために走ってきたお母さんがいました。そういう時間も、赤ちゃんを抱えていると取れないんだなということを感じました。

そういうことで、子守もしますし、お母さんと一緒に子育てのお手伝いもします。ご飯作りやお掃除、病院や健診の同行などをしたり、子どもを遊びに連れ出したりします。とにかく、その時できる、精一杯の支援で子どもの育ちを応援しているのが居場所「ひだまり」です。

「ひだまり」では、みんなでスタッフも一緒にテーブルを囲んでご飯を食べます。これが一般的なのか一般的なでないのか分かりません。でも、何とか私たちは普通と思える暮らしをさせたいので、さあご飯だよと思ったら、みんなテーブルのところで宿題をしていたりトランプをしたりしていたりするんですけども、片付けてと言って片付けさせて、テーブルを拭いて、マイお箸を並べたり小皿を並べたりしながら、みんなで「いただきます」して、いろんなお喋りをしながらご飯を食べるんです。

今子ども達の生活で、貧困に限らず孤食、一人でご飯を食べる子どもが増えています。親も忙しいし、子どもも忙しい、塾に行っていれば、車の中でおにぎりを食べる子どももいます。お父さんは帰ってきたらパソコンのそばで食べるという家もあります。お母さんも仕事があるので、みんなバラバラに孤食です。家庭の団欒が日本の中から少しずつ減ってきているような気がします。みんなバラバラなので、ここでみんなでご飯を

食べることで、いずれ子ども達は大人になって家庭を持ったときに、皆んなでご飯を食べる楽しさとか、こうやって食べるんだよということを引き継いでいってもらいたいです。

私がずっと関わってきたお母さんたちは、そういう家庭で育ってなくて、コンビニ弁当しか食べたことがなかった人が親になって、ネグレクトといわれるようになった

りするんです。やはり体験したことがなければ再現できないんです。

そういう意味では、今「子ども食堂」がブームですが、地域の中で地域の子どもの達を何とかしましよと、ご飯をみんなで一緒に食べましようよという動きが「子ども食堂」という形で広がりつつあるのは凄くいいことだと思います。

子どもの貧困を無くすために

○ 貧困の中にいる子どもの発見

子どもの貧困を無くすために、じゃあ私たちはどうするのかということです。先ず貧困の中にいる子ども達の発見です。貧困の中にいる子どもがわからなければ何もできないんです。ですから、地域の中であの家困ったよねとか、変だよねとか、不登校なんだって、非行なんだって、虐待なんだってというときに、もしかしたらその背景に貧困がないかなということちょと廻らせていただけるといいかなと思います。それで、あの子いつもあそこでウロウロしているよね、子どもがうろつく時間帯でないのに徘徊してるよね、とかがあった場合には、相談窓口を教えて欲しいんです。相

談窓口は市民にとって分りやすすくないといけません。地域の公民館とか、とにかく窓口を分りやすすいろんな場所に設置すると思います。何かあったら地域の子どものことをみんなで考えましようということです。例えば児童相談所に通告するまではないけれども、地域のなかのことで、みんなで考えましようよという窓口の設置が必要かなと思います。

あとは関係機関の連携です。やはりこういった問題を一つの機関で解決することはできません。連携なんです。光熱費を滞納して止まってしまうなんていうことも、関係機関のネットワークが作れればいいなと思います。

○ 貧困の中で生活している子どもへの支援=ふつうの暮らしを提供する

それから貧困の中で生活している子どもへの支援は、やっぱりふつうの暮らしを提供するということだと思います。それでそのふつうの暮らしというのは、1日3食食べることだったり、お風呂に入ることだったり、着替えをすることだったり、お誕生会を祝うとかということですね。公民館とかで地域の子どもの誕生会をやってもいいかなと思います。子どもだけではなくておじいちゃんおばあちゃんも一緒になってお誕生会をやるとか。幼稚園、保育園、学校へ通うなんていうのもふつうの暮らし

ですよ。ふつうの暮らしができるようにしてあげる。やっぱりお金のないお宅、所得がなくて保育園にも入れない、申し込んでも入れないという事情もありますけれども、保育園に入れるというのは結構ハードルが高いんです。お着替えを持っていかないといけないとか、朝何時までに連れて行かないといけないとか。親御さんによっては勤めをしていてとてもその時間には連れていけないという場合もあります。地域の中で保育園に連れていってあげるよという送迎の手伝いできたらいいのかななんてことも思います。

○ 貧困にならない為の予防

貧困にならない為の予防として、自立できる子どもを育てる、今いる子ども達を自立できるようにしていく、そのためには子ども社会の中に格差を作らないということです。格差ができると、自己肯定感が持てないんです。うちはどうせ親はバカだからというのをよく聞きます。それで、進学を諦めちゃうんです。どの家庭の子どもも安心して教育を受けられるような仕組みを作らないと駄目だなと思っています。ヨーロッパでは教育費は税金で賄うというのが主流の考え方です。日本は、教育費は親が負担するという考え方を変えて欲しいと思

最後に

最後はお誕生会の話です。ひだまりでは毎回ひとり1人お祝いします。ケーキを買ってきて誕生会をやったごとのない子もいます。本当にあなたが生まれてきて良かった、私たちみんな嬉しいよと、そしてあなたにしかなしえないことが世の中に待っているんだから、期待してるよって言ってほめて、本当に生まれてきて良かったねということでお誕生会をします。子どもは地域の宝です。育てて社会の力になります。子ども達が持った能力を本当に発揮できて、社会の中で生き生きと育って行って、地域の力になれるように子ども達を皆さんの一人ひとりの手で大事に育てるといことが今求められていると思います。

それぞれのできるところで、できることを何でも結構です。ご飯を食べさせることでもいいですし、素晴らしい音楽を月1回くらい聴く、なんでもいいです、習い事もできない子ども、部活動に入れない子どももいます。そんな中で、応援団を求めています。その子たちが巣立った時に、社会って厳しい訳です。仕事に就いた時、地方に

ます。どの子ども生まれ育った環境に左右されることのないように、貧困の家庭に育った子どもの環境に左右されないようにというのが法律の目的だと思うんです。是非とも日本が高校まで義務教育にするとかしてほしいものです。高校に行かせるのは大変です。学習支援で何とか高校に行かせないと、やっぱり低学歴、中卒だと安定した職業に就きにくいんです。だから何とか高校までは出したいですね。高校まで義務教育にできないのであれば、中卒でも何とか仕事に就けるような仕組みを作りたいと思います。

いて都会に行ったとか、辛いことかみんな襲ってくるんです。嫌な上司がいた、嫌な同僚がいた、仕事がつい、というときに頑張れる力というのはその子が育ってきた中にどれだけの応援団があるか、お母さんの顔、おばあちゃんの顔、おじいちゃんの顔を思い浮かべられるような応援団があれば頑張りがきくんです。頑張って乗り越えられるんです。そのためには、他人かもしれないけれども、私たちは今「ひだまり」をやっている、いつしか今「ひだまり」に来ている子ども達が巣立っていったときに、あのおばちゃんが作ったカレーが美味しかったな、あのおばちゃんがいつも自分に関心を持って、いつも応援してくれたおばちゃんというふうに、今子ども達に揉まれながらやっています。

(本稿は、9月3日に開催された小山・9条の会・サマーフェスティバルでの講演を、講演者の了解を得て、講演録をもとに事務局で編集したもので、文責は事務局にあります。)